

---

# 同居人

美月 純

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

同居人

### 【Zコード】

Z5716D

### 【作者名】

美月 純

### 【あらすじ】

雄二と芽衣はお気に入りのマンションを見つけ住み始めた。しかし、少しづつおかしながら…

(前書き)

やや性的な表現があります。やや暴力的な表現があります。

「うわ～素敵！」

「おお、広い！あつー！」うちにも部屋が・・・。」

「ほんとだーすごいね。」

「なあ、ここ、書斎に使ってもいい？」

「え～、雄一に必要あんの？」

「お願い！夢だつたんだよ。書斎つて。」

「もう・・・仕方ないな。その代わり、あたしにも使わせてね。  
「ああ、いいよ。俺が使わないときは芽衣が使っても。」

「OK！ならいいわ。」

「やつた！決まりだね。」

「かなり気に入っていただけたようですね。」

「ええ、でも、島田さん、これで本当に10万ですか、家賃？」  
「もちろん、管理費込みで10万ポツキリです。」

「だつて、これいわゆる3LDKですよね。」

「ええ、3LDK+納戸+ウォークインクローゼット付です。」

「しかも駅から徒歩5分でしょ。」

「まあ、実際には6分くらいはかかりますけど。」

「それにしても良さがあるよ。築は何年でしたつか?」

「7年です。」

「それで、そんなに下がるんですか?」

「いえ、7年くらいこなら、この地域ではまだまだ下がりませんね。」

「もうですね。今まで色々見て回ったけど、ほとんじがー5万ク  
ラスで、正直ちょっと敵しこんで、2DKにしようかって話してた  
ところなんです。」

「もうでしょ。確かに10万円の1LDK予算でしたら2DKか、せ  
いぜい2LDKが、妥当ですかね。」

「じゃあ、ここは破格ですよね。」

「ええ、かなり。」

「えっと・・・ちょっと聞きこへんですけど・・・まさか、何か、  
いわく付きとか・・・。」

「と、いこますと?」

「はつきここりますけど、どなたか自殺したとか。」

「いやだあ、でも、そういうこといろいろ聞いて聞いたことがあるわ。  
どうなんですか?」

「ははははー、そういう配ですか? 一切ありますよ。」

「ほんと?」

「ええ、この部屋はもちらん、このマンション自体で事件や事故な  
どは一切起きたことはありません。」

「じゃあ、なんでこんなに安いんですね? からくりを教えてください

よ。

「そうですよ。なんか、安すぎとかえって怖いし、安心できないわ。

」

「わかりました。まあ、ここを『』紹介するとたいていの方がそうおつしゃって、必ず聞いてきます。」

「そりゃそうですね。で？」

「はい、実はここは元々分譲物件なんです。つまり、元々買われた部屋なんです。」

「・・・」

「で、この部屋の大家さん、いわゆるオーナーがいて、その方が、賃貸物件として当社に管理を任せているわけです。」

「ああ、いわゆるリロケーションとか、そういうやつですか。」

「そうです。それで、その大家さんが、なぜか10万でいい、とおつしゃるんです。」

「大家が? 10万でいいと?」

「そうです。もちろん、当社も妙ないわくが付いた物件では困りますから、詳しくお聞きしたところ、その方は、地方では資産家のうちらしく、投資用にこの物件を購入したのですが、別にローンを組んで買つたわけではないので10万も取れば、充分元が取れるとおっしゃって、住む場所に困つてゐ人に貸してあげてください。と言われてるんです。」

「へえ、りっぱな方ですね。でも、このマンションを現金で買われたわけですか・・・、相当な資産家なんですね。」

「まあ、細かいことは私どもも存じませんが、その界限かいわいでは有名な

方で、いわゆる町の有力者らしいですね。」

「ふう、俺のよつな一介のサラリーマンには縁遠い話だな。」

「まあまあ、雄一、いいじゃない。あたしたちにはあたしたちなりの慎ましやかな幸せがあれば。」

「そういうもんかね。」

「そういうもんよ。お金がいくらあってもその方が幸せかどうかはわからないじゃない。」

「そうだな。ひょっとすると俺たちの方が幸せかもしないし。」「そうそう、こうして巡りあつた部屋も何かの縁があることよ。あたし、借りたいわ。」

「そうですか、奥様はかなり気に入っていたいたいようですね。ご主人は?」

「まあ、芽衣がそういうなら。借りようか。」

「では、決まりですね。早速、店に帰つてお申し込みをいたいで宜しいですか?」

「ええ、こきましょう。」

こうして、私たち夫婦は、その物件を気に入つて借つることになりました。

私たち夫婦には子どもがいなかつたので、一人では広すぎるかとも思いましたが、お互い仕事を持つ、平日は忙しくしているので、ほとんど寝に帰るための家ではあるものの、それでも、休日には一緒に寛げる快適な空間を探していたので、この物件はその条件にピタリでした。

そして、あたしたちは引っ越しました。

「ふう、ようやく片付いたかな。」

「雄一！ まだまだよ。ほら、あなたの書齋！ まだ、ダンボールが空いてないんだから。」

「ええ、いつも今日やる？ ちょっと、一休み。」

「もう・・・、しょうがないわね。早く片付けないと落ち着かないでしょ。」

「わかつてることだけ休もうよ。腹も減ったし、お茶くらいは沸かせるだろ。『一ヒー』飲もうよ。」

「はいはい、ご主人様、しょうがないから休ませてあげる。えっと、『一ヒー』、『一ヒーッと。』

「せり、『一ヒー』に入れてあるよ。」

「あつ、サンキュー、やかんは『一ヒー』ね。うわあ、やつぱいーなシステムキッチン、ほんとに安いよね。『一ヒー』。築年数の割にはきれいだし。」

「ああ、キッチンとか風呂とかは今風にリフォームしたっていってたよね。」

「うん、『一ヒー』の『一ヒー』、がぜん料理のやる気がぐるわ。」

「おお、それはありがたい！ 食事に期待が持てるな。」

「ちよっとびっくりの意味？ 今までの食事は『一ヒー』不満とでも？」

「いえいえ、滅相もない。今までも充分おこしゅ『一ヒー』やった。」

「つむ、よろしい。」

「あはははー。」

「ふふふふ、それにしても快適だわ。もつもつと荷物が片付いたら、かなりリラックスできそう。」

「だなあ、『』もう少し大きめのソファ買つてもいいな。  
『』そうね。いや、広めのカーペットも敷いてね。」

「うん、おこ、ちょっと『』ことよ。」「  
『』ん? なあに?え? あつ、ちょっと。雄一・・・。」

「いいじゃないか、もう、『』は俺たちの城なんだから。」「  
でも、お湯、ほり。」

「いいよ。ほり、止めてきた。な。芽衣・・・。」

「あん、雄一、ずるい。そんなど『』。もつとやせこべ。」

「芽衣、なんか今まで声とか気にしてたけど、『』は壁も厚そうだし、思いつきりできるな。」「

「ばか・・・、恥ずかしいよ。」

「芽衣・・・。」「

「ただいま、つて芽衣はまだか。今日も残業かな? あいつも忙しいな。ん?あれ? 書斎の電気つけっぱなしだったか。」

「芽衣、なんか今まで声とか気にしてたけど、『』は壁も厚そうだし、思いつきりできるな。」「

「ただいま、つて芽衣はまだか。今日も残業かな? あいつも忙しいな。ん?あれ? 書斎の電気つけっぱなしだったか。」

雄一は何の気なしにスイッチを消した。

そしてリビングに戻り、テレビのスイッチをつけて、煙草に火をつけた。

「ふう、やつぱいにな。」のコピング、ちょっと無理してこのソフトを買った甲斐があつたな。寬げる。芽衣には悪いけど、先、飲つてるよ。」

雄一は一人が写っている写真に向かつて、ビールを向け乾杯の仕草をした。

「ただいま、遅くなつてごめんね。酷いんだよ。課長つたら、帰る間際になつて残業だつて言い出してや。」

「またかあ、お宅の課長はDUNKSの俺たちにやきもち妬いてんじゃない？」

「やうかもね。課長のお子さんなんか荒れてるらしく。あーおながすいた。なんか食べた？」

「いや、一杯やつてたけど、食べてない。」

「そつか、ようじ、折角のキッチン活かさないとね。」

「ええ、これから作るの?なんか惣菜とか買つてくれればよかつたのに。」

「」

「いいえ、これからは料理もしつかり、しますわよ。これでも主婦ですからね。頑張りますわ!」

「やれやれ、張り切るのはいいけど、こつまで続くかだな。」

「なーにそれ、ほら、雄一は寛いでないで、お風呂の用意くらいでよ。」

「はいはー。」

風呂に向つた雄一は風呂桶を見て不思議に思った。

「おー、芽衣?今朝風呂入れてつた?」

「え？ なーに、聞こえない？」

リビングに戻った雄一は再び芽衣に尋ねた。

「いや、今朝風呂桶に水入れてつた？」

「え？ 入れてないわよ。タベは一日田のお湯だからって抜いたし。」

「だよな。俺も今朝シャワー浴びたけど、風呂には水は入れてなかつたと思つたけど・・・でも、蓋ふたがしまつてたから確認したわけじゃないしな。」

「やだあ、あたしは入れてないわよ。」

「だよなあ。ああ、もしかすると抜いたと思つたけど勝手に風呂の栓が閉まって抜けてなかつたのかも。」

「ああ、そういうえば栓は風呂桶の中にそのままだつたわね。」

「なあんだ。びっくりしたよ。」

「もひ、ちゃんと抜いてよね。入れ替えてね。」

「ああ。」

そういうつて再び雄一は風呂の用意をしにいった。

「にしても・・・なんかこの水きれいだな。ま、いつか。」

栓を抜いた風呂桶から水が勢いよく流れしていく。

風呂の準備を済ませた雄一がリビングに戻ると芽衣が鼻歌を歌いながら機嫌よく料理をしていた。

「どう？ もうできる？ 腹減つたよ。」

「はいはい、残り物だけど、さすがキッチンがいいとアイデアが浮

かんできてね。けつじうこけるわよ。」

「ほんとっさつすが芽衣ちゃん、惚れ直しちゃうね。」

「あらあ、雄一さん、じゃあ、こ・ん・や・も・・・。」

「もちろんさ。」

そういうて雄一は芽衣の頬にキスをした。

「なんか、新婚の頃に戻ったみたいね。」

「うん、住むところが変わるとこいつも気分が変わるもんかな。結婚して5年、正直ちょっと倦怠期だったもんな。俺たち。」

「そうね。お互い仕事が忙しいのもあったけど、前の家では狭くて、一緒に寝てもなんか休まらなかつたし、喧嘩けんかも多かつたしね。」「そうそう、こつして語る時間も少なかつた気がするな。こつちは通勤も近いし、駅からも近いから、ほとんどそういうストレスを感じないしな。」

「うん、前の家は駅からまたバスだつたし、バス停からも15分も歩いてたんだから、今の生活からは信じられないよね。」

「ほんと、あの生活には戻れないし、戻りたくないね。」

「お互たがい少し収入も増えたし、子どもは作らないって決めてるから、こういう少しさは贅沢な暮らしをしてもいいわよね。」

「もちろんさ。一人仲良くやれるなら、このくらいの出費、といつても予想外に安かったからほんとに助かっただけだな。」

「ほんとよね。この家賃なら充分やつてくれるし、そういう、少しお金貯めて海外旅行とかにもいけるかもね。」

「いいね。次の正月は海外か。」

「そうね。がんばろー。」

「だな。よつしー仕事のやる氣も出でたぞー。」

「うふふふ。」

「あははは。」

私たちは、ようやく手に入れた快適な生活に充分満足し、幸せを感じていました。

といふが、ある日のこと。

「ねえ、雄一見てー！」

「ん？ ビックした、大声で、ビッククリするじゃないか。」

書斎で仕事をしていた雄一に血相けっさくを変えて芽衣が部屋に入ってきた。

「これ、見てよ。」

「ん？ 何？ 電気料金の明細じゃない。」

「そうよ。じい、じの値段。」

「え？ 9690円？ なんだこりゃ、高すぎない？」

「でしょーーありえないわよね。なんか間違ってるわよ。こんなに使つことないでしょ。今までエアコンを使つた夏場でも5千円がせいぜいだったのに。」

「だよな。今はエアコンも使つてないし、暖房はガスだし。ちょっとおかしいよな。」

「ねえ、雄一、文句言つてよ。電力会社に…」「え？俺が？なんかやだなあ。」

「なに言つてんのよ。毎月こんなじや折角の旅行計画が台無しよ。」「そりやか。そうだな。わかつた。電話してみる。」

そういうて雄一は電力会社に電話を入れた。

「あ、もしもし、電気料金のことでお伺いしたいんですが……。」

電力会社と話をした雄一が芽衣に報告をした。

「なんでも、基本料金が今までと違うらしい。アンペア、つまり電気の容量が違うんで基本料金も上がつてゐるつて言つてた。」

「なーにそれ、どれくらい違うのよ。」

「千円くらいらしい。」

「千円？それでも変じゃない？だつて今までより4千円は高いわよ。千円引いても3千円は高いじゃない。」

「うん……でも、メータは確かにそりなつてますつて。」

「なによそれ。もう、雄一いつたら頼りにならないわね。」

「そんなに言つなら、芽衣かけるよ。文句言つたつて実際にメーターがそうなつてるんじや、仕方ないじやない。節電を心がけるしないよ。」

「ふう、そりやか。」「めんね、雄一、ちょっとHキサイトしちゃった。」「いいよ。確かに高いのは事実だし、ビックリはあるよな。」

「あなたの言つとおり節電を心がけましょ。」

そうして事は収まつたかに見えたが、それから一週間後。

「雄一……、ちょっと、これ。」

「ん? なんだい? え? 今度はガスの明細。まさか……。」

「見て……。」

「はあ? 7千円? ありえない。いくら芽衣が張り切つて料理したつて言つても、平田は風呂以外使わない日もあるのに。」

「変よ。絶対変! ガス会社にも確かめて。基本料金なんてガスは変わらないはずよ。」

「わかった。でも、今日はもひ受け付け終わつてるみたいだな。」

「そうね。雄一悪いけど、明日、会社から聞いてみてくれない? 「会社から? うん、わかつた聞いてみるよ。」

次の日、帰宅した雄一は芽衣にガス会社に連絡して聞いた内容について話した。

「基本料金は変わらないけど……ちゃんとその量を使つてますつて。メーターがそうなつてます。だつて。」

「おかしいって言つた?」

「言つたよ。うちは子どももないし、平日の昼間は誰もいないから使つことはあつませんつて。でも、実際のメーターがそうなつてるから文句を言われても困るつて。」

「……、どうこう」と……。」

それから、注意深く生活をしていくと、おかしなことが次々出てきました。

「芽衣、ビール冷やしておいてつていったじやん。」

「え？ 今朝入れといたよ。一本も。」

「つて、一本も入つてないじゃん。」

「え・・・、絶対入れたつて。ほら、いつのまにかストック減つてるのでしょ。」

「ほんとだ・・・。」

ある日は「んな」とが

「雄一、今朝トイレ入つて電気つけっぱなしだつたでしょ。帰つたら点いてたよ。」

「え？ 今朝は芽衣も知つてるだろ。寝坊して慌てて出て行つたからトイレも入つてないよ。」

「え？ あたしも入つて確實に消したの覚えてるのに・・・。」

「・・・なんで。」

「やつぱりこの部屋変だよ。なんで？ 誰があたしたちがいない間に使つてるの？」

「そんな馬鹿な。カギは付け替えて防犯用のディンプルキーだから合鍵は作れないって不動産屋も言つたし、ここには5階なんだから外から進入するなんて無理だろ。」

「そうよね。確かに無理だわ。でも、事実私たち以外に誰かがここに入らないことなど起こらないでしょ。」

「・・・。」

「雄一、あたし怖い。」

抱きついてきた芽衣を支えながら雄一も不安を抱いていた。

その夜。

ガタツ、ガタツ

眠りに付こうとしていた一人の寝室で物音がした。

「なあに、雄一、なんか音がする。」

「ああ、確かに、となりか?」

「今までこんな音したことなかつたよ。お隣さんも朝早いからこの時間は寝てるって言つてたし。」

「そうだよな。じゃあ、いつたい・・・。」

ガタツ、ガタガタツ

「雄一! 押入れ。」

「ああ、確かにそこの押入れからだよな。ちょっと待つて。」

そつとベッドを抜け出した雄一は、書斎にある金属バットを持ち出して寝室に戻った。

「いいか、あけるぞ。」

ガラ!

すぐに芽衣が電気をつけた。

「?」

「何もないぞ。誰もいないし・・・。」

その夜はそのまま何事も起らなかつたが・・・。

そして住み始めてからちょうど一ヶ月がたつた。

「すみません、課長、なんだか体調がおかしくて。」

「困るな美杉くん、仕事溜まつてるのに。」

「はい、申し訳ございません。でも、ちょっとこれ以上は辛くて。「ふん、仕方ないな。新しい住まいに調子に乗つて夜更かしでもしてるんだろ。夫と楽しんでるんじゃないかな。」

「・・・。」

「ふん、いいよ。早退したまえ。」

「ありがとうございます。では、失礼します。」

顔色の悪い芽衣に同僚が近づいてきていった。

「なあにあのボンクラ課長、ひどくない！こんなに顔色悪いのわかってるのに。それに、あの台詞、ぜつたいセクハラだよ。訴えてやりなよ、芽衣！」

「うん。確かにひどいよね。でも、今日は怒る気力もない。」

「そつか、そうだよね。氣をつけて帰つて、大丈夫？一人で帰れる？」

「うん、なんとか、じゃあ、ごめんね。お先に。」

「いつもして体調を崩した芽衣は早退をして家に帰つた。

「まいったなあ、なんだろ、なんか悪いもん食べたかな？」  
なんとか家にたどり着いた芽衣は部屋のドアを開けた。

「う～、早くベッドに横になりたい。」

そう言つて芽衣は玄関に入るリビングのほうからテレビの音がした。

「え？ なあに、雄二も帰つてるの？ やつぱ体調崩したかな。一緒に食べたものがあたつたのかな？」

そう思つて、そのままゆつくつとリビングに近づくと、ソファに座つている人影が見えた。

『やつぱ雄二が帰つてたんだ。』 そう思い

「雄二！」

と声をかけるとその影が「ビクツ」と反応した。

そしてゆつくつとこちらを振り返ると、見知らぬ男がにやりと笑つていた。

その瞬間言葉も出さずに芽衣は体の力が抜け、そのまま氣を失つた。

気がつくと身体の自由が利かない。

よく見ると椅子に縛り付けられて身動きできず、口にはガムテープが貼られて声も出せなかつた。

「ううう、うーっ」

必死で声を上げ身体をバタつかせたが椅子はさらにテーブルに固定されて動かないようになつていた。

薄暗い部屋の中で後ろから何かが近づいてくる気配がした。芽衣はそれに抗うようにさらに身体をばたつかせた。

「クククッおとなしくしてください。何もしませんから。あなたは大切な私の同居人ですから。危害を加える気はありません。」  
低いその声は芽衣の耳元で囁かれた。とても不快なトーンの声で、

聞いただけで鳥肌が立つた。

「クククツ何も恐れる必要はありませんよ。本当に・・・、本当に何もしませんから。ただ、じつとしていてくれればいいんです。『縛られて口にガムテープまでされて、危害を加えないなんて、すでに加えてるじゃない!』と心の中で芽衣は叫んだ。

「だつて、あなたは僕の大切な同居人ですから、危害なんて加えるわけありませんよ。」

同じようなことを繰り返すと、その男はにやりと笑った。その歪んだ笑みに芽衣は背筋が凍るような悪寒を覚えた。

「いいですか、僕はあなたの同居人ですから、いや、正確に言えばあなた方が僕の同居人なんです。」「？・・・・・。」

「わかりませんか?この家は元々僕のものなんですよ。不動産屋から何も聞いてませんか。」

芽衣はハッとした。そういうえば入居の際にあまりに家賃が安いのでその理由を尋ねたことを思い出した。

「思い出されたようですね。そうです。ここは僕が買った部屋なんですよ。つまり、僕がオーナーであなた方はそこを借りたんです。つまり、あなた方が僕の家の同居人つてことです。」「・・・・・。」

「だから、あなた方の生活は僕の生活もあるんです。ですから、あなたとあなたのご主人の毎日の生活はすべて知っていますよ。」「・・・・・。」

芽衣は身動きはできないがそのまま見つかりとその男を見た。

「あなたたちが毎日何を食べて、どんなテレビみて、いつ風呂に入っているか、何でも知っているんですよ。」

「…………」

「クククッ、それには。あなた方がどんな夜の生活をしてるかも……ね。」

思わず芽衣は目を伏せた。そして、悔しさで涙がこぼれた。

「おやおや、何も泣かなくてもいいじゃないですか、そんなに恥ずかしいですか？」

「…………」

「だつたら、あんな風に激しくセックスしなけりゃいいのに。恥ずかしいならね。」

もう一度芽衣は男の顔をキッと睨み、今まで以上の憎悪を相手にぶつけた。

「おお、これはまだそんな目で僕を睨む気力がありますか、じゃあ、僕にもあなたの『主人』にしてると同じことをしてくれますか？そんな大人しい顔をしてるのに、激しいですよね。夜は……ククククツ。」

もう、芽衣は目をそらさなかつた。この男を殺してやりたいと心から思った。

「ふう、仕方ない、じゃあ、僕があなたの『主人』と同じことをしてあげましょうか？芽衣さん、ずっと僕は見てたんですよ。あなたのこと、あなたがセックスしてるところ見ながら、それに風呂に入っているとき、トイレで用を足してる時もね。すべて見ていた。そして、僕は自分で慰めていたんです。わかりますか、この切ない気持

ちが。」

再び芽衣の身体に悪寒が走った。この男がずっと自分を観察し、すべての行為を見られていたと思うと、吐きやうなぐらいの嫌な気持ちに陥つた。

「でもね。やつと、その思いが叶えられますよ。目の前に身動きできない芽衣さんいるんですからね。クククッ、ひゃひゃひゃひゃ。」  
高らかに声を上げて男は笑いながら自分が身に着けている上着を脱ぎだした。

芽衣はこれから起じるとしていることを考えると体中の血の気が引いていった。そして正気を失いそうになつたが、できるだけ冷静に頭を保つよう努めた。

『男はきっと私を襲う時に油断する。』の椅子に縛られた格好じや奴の思うことはできないはずだわ。だからきっと私の縛られている繩を解くはず。その瞬間が勝負だわ。』

芽衣は目の前で一枚ずつ衣服を脱ぎだした男を凝視した。

「ほう、そんなに僕の体は魅力的ですか、あなたの『主人よりも』ですか。ひやひやひや。」

チャンスを窺つて『いるのを自分の身体を見られて』いる勘違いした男は自慢げに身体を誇示した。しかし、その腹はたるみ、筋肉はぶよぶよでとても見るに値する体つきではなかつた。

「もうすぐ、芽衣さんをこの手の中に抱いてあげますからね。この身体であなたを包み込んであげますからね。」

こみ上げてくる恐怖に耐えながら、それでも、芽衣はその男をしつかりと見据えて一瞬の隙を狙うことあきらめなかつた。

「そうだ。いくらなんでもこの格好じゃ、できませんよね。仕方ありませんね。今からロープを解きますね。」

芽衣は『来た』と思つた。悪寒に耐えて待つていた瞬間が来ようとしている。

「しかし、芽衣さんは確かにスポーツ、そり、よくジムに通つて・・・。そう、ボクササイズでしたつけ、なんか格闘技まがいのことをしていたんですね。」

『それがどうした。早く縄をほどけ』と思つていた芽衣の顔をジッと半裸のまま覗き込んだ男は急に田つきを変えた。

「クククッ、僕はね。ずっとあなたを見てるといいましたよね。あなたの田はあきらめていらない田だ。僕が縄を解いた時に逃げ出そうとか、僕を打ち負かそうとか、そういう田ですよね。何か悪いことを考えていますね。」

『どつちが悪いことを考えてるんだ。』と思いながら芽衣は自分の男を憎悪する気持ちが田に表れてしまつたことを少し後悔した。

「ククククッ、残念ですね。そつは簡単にあなたの思い通りにはなりませんよ。悪いけど縄を解く前にもう一度あなたには眠つてもらいますね。」

そういうと男は部屋を出てとなりの部屋に向つた。そして、ほどなく戻ってきたとき、その手には何かのビンを持っていた。

「クククッ、これがなんだかわかりますか？クロロフォルムですよ。これであなたをもう一度眠らせてこんどはベッドに縛り付けてあげます、あなたとご主人がセックスするベッドにね。ひやひやひやひ

や。

『万事休すか。』

『ばんじゅう

いづつ

』

眠らされてしまつては抵抗はできない。

芽衣はがつくりと身体から力が抜け、こんな男の思いのままにされるくらいなら醒りられる前に舌を噛み切つて死のうと考えた。

「今から口のガムテープをとつてあげますね。クロロフォルムはできるだけすばやく吸い込んでもらわないといけないので呼吸が楽な方がいいですからね。でも、大声とかは出さないでくださいね。最も出す前にこれで口を塞いでしまいますけどね。」

そういうと男はビンの蓋を開けて、手に持っていたタオルにクロロフォルムを染み出させ、素早くビンの蓋を閉めた。

そして、芽衣に一步一歩近づいてきた。

『もう、だめだ。』芽衣は俯いて男を見ることができなかつた。舌を噛む準備をしていた。男がガムテープを外した瞬間に舌を噛み切ろうと考えていた。

男の生暖かい手が芽衣の頬に触れて、貼られているガムテープを少しづつ外しだした。

『痛みますか、かわいそうに、あなたの可愛らしい顔が赤く腫れてしまつてます。やつぱり猿轡さるくつわにすべきでしたね。』

もう、芽衣には男の声は届いていなかつた。これから自分を襲う苦痛とこんな形で人生を終わらなければならない自分の運命を呪つた。

そして、雄二の顔を思い出しながら、何度も謝つた。

『雄一、ごめんね。あたしもう、無理みたい。ごめんね。こんな形で雄一と別れるなんて、悔しい。』

芽衣はガムテープを外されたが、気持ちが萎えて声を出すこともできず、がつくりとうなだれていた。

「ほう、いい口ですね。もう、あきらめましたか？でも、素直が一番です。そう、僕はあなたに危害を加えるつもりはない。これから行つのは愛の儀式ですから。その儀式が済めばあなたは自由ですか、僕はこの思いさえ遂げられればもう、思い残すことはありません。このままここを出て行きますから、ここであつたことは誰にも知られません。僕とあなただけの秘密です。当然ご主人にも知られません。だから、ほんの一瞬ではあなたは自由になれるんですよ。もちろんあなたを愛してるんですから、殺したりはしない。」

その言葉に芽衣は

『そうだ。もし、このまま身体を許し、この男が満足をすればそれで解放されるのかもしれない。それに、ここであつたことは誰にも知られる事はない。もちろん雄一にも。おとなしくして、ほんの一瞬耐えればまた、元の生活に戻れるのかもしれない。反対に逆らえば逆上した男に殺されるかもしれない。私が耐えればすべて解決するのかも。』

芽衣は自分に言い聞かせるように自問自答した。

「クククッ、そ、いい口ですね。じゃあ、少しの間また眠つてもらいましょうね。」

そういうと男は芽衣の口元にクロロフォルムを染み込ませたタオルをかぶせようとした。

「待つて！」

急に言われた男はビクッとなり、一瞬身体を硬直させた。

「なんですか、脅かさないでくださいよ。ほら、少しの間の辛抱ですよ。」

再び男がタオルをかぶせようと動き出した時、また芽衣は

「待つて。」

じわじわよりは少しふトーンを落として努めて冷静な声で言った。

その声のトーンに安心したのか男が手を止めて聞いてきた。

「なんですか、大丈夫ですよ。死んだりしませんから、僕はこれでも薬品には詳しいんですよ。少し辛抱してくれれば悪によつにはしませんから。」

「違うの。ねえ、そのクロロフォルムで寝てしまつたら、どれくらい目を覚まらないの?」

「え?」

男は考へてもいない質問を芽衣から振られて困惑つた。

「時間ですか? そうですね。吸い込む量にもよりますけど、一時間か一時間くらいですかね。」

「今何時?」

また、突飛押しもない芽衣の質問に男は少し慌てた。

「え? 時間ですか? えっと・・・、5時30分を少し回つたところです。」

部屋の奥にある時計を覗き込んで男は答えた。

「そりゃ、じゃあ、早くしないと、だんなが帰つてくるわ。」

「え?」

「もう、五時半でしょ。そろそろ退社時間よ。今日は早く帰つて来るつて言つてたの。私の体調が悪いこと知つてるから、今日は早く帰つてしてくれるつて言つてたのよ。もし、すぐに会社を出たらあと一時間くらいで帰つてきちゃうわ。」

「え? そりなんですか。じゃあ、この主人を入れないよつてしなきや。」

「どうやって? 彼は力ギも持つてゐるし、もし、チヨーンとかしてい

「

たら不信に思つて警察とかに連絡をするかも知れないわよ。」

「・・・・・。」

男は急な展開に戸惑つてゐるようだつた。

「ねえ、あなたは私が欲しいのよね。私の身体が欲しいんでしょ?」  
「・・・・・。」

男は黙つて頷いた。

「なら、そんな薬品で寝かせたら反応もしないからつまらないでしょ?かといって起きるまで時間を待つてたらだんなんが帰つて来てしまう。」

「どうすればいいんでしょう。僕はあなたと思いを遂げたいだけなんです。」

「そう。あなたそんなに私のこと好きなの?」

男は再び黙つて頷いた。

「わかつたわ。最初は怖かつたけど、そんなに私を思つてくれるのはなんだか少し嬉しい。正直言つとね。最近だんなとのセックスはマンネリ化してたのよ。激しくしてたのはそうしないと感じなかつたから。新鮮さがなくなつてたの。」

男はその言葉に耳を疑つたが、同時に大きな期待を込めた表情に変わつた。

「ねえ、このまましましょ? もちろんちゃんとベッドに行つてもう、私も覚悟決めたから。どうせなら楽しみましょ? だから眠らせたりしなくていいわ。ロープだけ解いてちゅうだい。逃げたりしないから。」

「・・・・・。」

男は期待感はあるが、やはり信じられないという表情も浮かべ、

考へている。

「だつて、私だつてこんなことだんなに知られたくないし、あなただつて私の身体抱きたいでしょ？私も結婚してからは他の男性としたりしたことないから、正直言うと期待してるの。なんだか、身体が熱くなつてる。」

そういうと芽衣は腿を擦り合わせるようにしてモゾモゾと身体をくねらせた。

その仕草に男は生睡なましづばを飲み込みその音が芽衣にも聞こえた。

「ねえ、信じて。私も欲しくなつてきたの。だつてあなたのそこさつきからずつと固くなつてるみたいだから。そんなの見たら女だつて感じてくるのよ。」

男はもうすっかりその気になつた表情になり、芽衣の擦れている太腿ふとももに視線を釘付けにしていた。

「わかりました。じゃあ、今からロープを解きますね。でも、待つてくださいね。」

そういうと男は台所に向かい、戻ってきたときには包丁を持っていた。

「なあにそれ、そんなもの持たなくとも抵抗しないわよ。それよりだんなが帰つてくる前に。ね。」

「でも、これは万一一に備えてです。とにかく抵抗されたらすぐに刺しますからね。いいですね。でも、そんなことをするのは本意じやない。だから抵抗しないでくださいね。」

「わかつたわ。お願ひ早く。」

潤んだ瞳で芽衣は男の目を見つめた。

男はその言葉に促されるように、芽衣の足元に伏して足を椅子に

固定しているロープを解いた。次に後ろに回つて手を縛つているロープを解きだした。

芽衣は自由になつたが、やはり長時間縛られていたため、血の流れが止まっていたせいもありしびれたようになつていたので、手首や足首をマッサージした。

「ありがとう。ちょっとだけ待つてね。まだちょっと立てない。マッサージしてるから。」

その姿を包丁を持ちながら男はジックと見つめていた。

「そろそろ大丈夫かな。よいしょっと。立てるわ。じゃあ、寝室に向いましょう。」

そういうと芽衣の方から先頭に立つて寝室に向つて歩き出した。男は芽衣を追うように、しかし、油断することなく包丁は芽衣に向けたまま黙つて後を歩いた。

寝室に入ると薄暗くなつっていたので、電気をつけた。

今までリビングでも日が落ちて薄暗くなつていたので急に明るくなりまぶしさを感じた。

男も同様に薄暗い部屋から急に明るくなつたので一瞬まぶしそうな顔をした。

「じめんなさい。まぶしかったわね。どうする電気は消した方がいい？」

男は芽衣を見るとゆっくりと首を横に振つた。

「わ、明るい方がよく見えるものね。あたしの身体みたい？」  
男は今度はゆっくりと頷いた。

「ふふふ、緊張してるのかわいいのね。いいわ。タップリと楽し  
みましょう。」

そういうて芽衣は自分からベッドに横になり、男の方を見つめながら両手を広げた。

男はその姿をしばらく見ていたが、やはり欲望には勝てず、芽衣にかぶさるように身体をベッドに向って倒していった。

ちょうど馬乗りのような形で芽衣を足で挟みながら身体を起こしていだが、そこにまだ包丁が握られていた。

「さすがに包丁をもつたままはできないわよ。大丈夫よ安心して、それをどこかに置いて。」

芽衣に促され、戸惑つていて、ちょうどベッドには面みやが付いていたので、そこに包丁を置いた。

「いいですか、ちょっとでもおかしなことをしたらすぐにその包丁で刺しますからね。」

「わかるてるわ。大丈夫よ、もう、楽しむつて決めたんだから。あなたも楽しみましょ。」

そういうと芽衣はもう一度手を広げて男を受け入れる仕草をした。

男の我慢も限界に来ていたようで自分でまだ身に着けていたズボンを脱ぎ、下着一枚の格好になつて芽衣に覆いかぶさってきた。そして、芽衣の首筋に唇を這わせて、身体をまさぐり始めた。

「ああん、ダメよ、もっと優しくして。焦らないで、まだ時間はあるから。ね。もっとゆっくり感じさせて。」

その言葉に男も動きを缓め、ゆっくりと芽衣の身体をほぐすように触り始め、再び首筋に唇を這わせていった。

「ああ、いいわ。上手よ。その調子、そう、ゆっくりね。そう、そい、首筋から胸のほうへキスして、そう、そこが一番感じるの。」

愛らしい声でもだえながらいつ芽衣の言葉に男は、芽衣の顔をジツと見つめて、にやりと笑みを浮かべ、今度は首筋から胸へ舐める

よう口にキスをし始めた。

ちょうど芽衣の胸に顔をうずめた瞬間

「うっ！」

という詰まるような声が男の口から漏れた。

次に男は芽衣に向けて顔を起こし、見開いた眼でジッと睨むとそのまま再び芽衣の胸に顔をうずめた。

見ると男の首に、置いてあつたはずの包丁<sup>かたわ</sup>が突き刺さっていた。芽衣は男の身体を跳ね除けるようにどかすとベッドの傍らに立ち、息を整えた。

「はあはあはあ、やつたわ。」

ベットは男の首筋から溢れ出る血で真っ赤に染まり始めていた。

ピンポーン！

その時、雄一が帰ってきた。

すぐに玄関に飛び出した芽衣は入ってきた雄一に抱きつき、大声で泣き出した。

「芽衣？…どうした？何かあつたのか？」

泣きながら芽衣は寝室の方を指差し、ガタガタと震えていた。

「なんだ、寝室に誰かいるのか？」

「殺したの・・・。」

「え？なんだつて？」

「殺したの。男を、あたしを襲つてきたの。あたし縛られて、脅されて、でも、なんとか頑張つて油断させて隙を突いて包丁で男を刺したの。」

「なんだ? ベッドに寝てた? しつかりしろ芽衣、夢でもみてるのか?」

「違うのー。本当なの、あたしたちの家に男が住み付いてたの。そしてあたしたちのことずっと監視してたの。同居人とか言って、そして、あたしが早退して帰つたら男が我が物顔でテレビ観ながらお菓子食べて……。」

そこまで話すと雄一に抱かれて急に安心したせいか、身体の力が抜けて氣を失いそうになつた。

「芽衣ーしつかりしろ。ちよつといじこころ。様子見てくる。」

「うん。」

やうじりと雄一は芽衣を玄関先にそつと座らせて、恐る恐る寝室に向つた。

芽衣は目を閉じて今までの恐怖の時間を思い起こしていた。

「芽衣、脅かすなよ。寝室には誰もいなによ。」

雄一の言葉に耳を疑つた。

「え? …何言つてんの。ベッドに男の死体が横たわってるでしょ。血に染まってるでしょ。」

「おじおじ、うたた寝して夢でも見たんだろ。ベッドには誰もいなによ。」

「うむーそんなはずないわ。」

やうじりと芽衣は急いで立ち上がり、寝室に向かつた。

部屋に入ると雄一の言つとおり誰もいなかつた。さつき男の首に包丁を突き立てた感触はまだ、手に残つているところ。ベッドには血の痕すら残つていなかつた。

芽衣はベッドの下を見た。包丁は? 確かに、男の首筋に包丁を突

き立てたはずだった。

「芽衣、大丈夫か？体調悪かつたんだよな。だから悪い夢でも見たんだろ。」

そういうながら雄一が寝室に入ってきた。

芽衣は狂ったようにベッドのあちこちを調べ、ひざまづいてベッドの下までくまなく探し回った。

「もう、大丈夫だよ。芽衣、何もないから、少し休みな。飯はなんか作つて食うから。な。」

散々探したが何一つ残つていない。残つているのは縛られた手首と足首の痛みと手に残る男を刺した感触だけだった。

寝室の床に呆然と座り込む芽衣の姿を雄一は「しょうがないな。」  
というようになつめていた。芽衣はフッと自分を見つめている雄一の姿を見た瞬間顔がこわばつた。

「ん？どうした、芽衣？」

芽衣の大きく見開かれた瞳には、雄一の後ろに立ち、にやりと笑みを浮かべた“同居人”的姿が映し出されていた。

了

(後書き)

この物語はすべてフィクションです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5716d/>

---

同居人

2010年10月8日15時14分発行